

中部支部

かった病変からのものと考えられた。

23. 同時性多発肺癌症例の臨床的検討

信州大学第二外科

藤田知之, 小林宣隆, 椎名隆之
牧内明子, 近藤竜一, 沼波宏樹
金子和彦, 羽生田正行, 天野 純

国立療養所中松本病院呼吸器外科

蔵井 誠, 矢満田健

当科で外科治療を施行した同時性多発肺癌症例 25 例 (男性 13 例, 女性 12 例) について術後成績の評価を行い, 腫瘍占拠部位, 術式, 組織型, 病理病期, 予後, その治療方針などについて検討した。腫瘍の大きさ, 腫瘍の占拠部位などで比較しても各群間に有意差は認めず, 3 年生存率は 69.8%, 5 年生存率は 61.1% と比較的良好であった。

24. PBSCT を施行した非小細胞肺癌の 1 例

浜松医科大学第 1 外科

高橋 毅, 鈴木一也, 北 雄介
伊藤 靖, 数井輝久

【症例】50 歳男性。98 年 12 月頭痛, 複視を主訴に受診。精査にて左下葉原発性肺癌, 多発肺転移, 転移性脳腫瘍と診断された。【経過】脳転移巣切除後, 化学療法を 2 コール施行し肺転移巣の消失を得, 原発巣の部分切除を施行した。術後 1 年 4 カ月, 肺転移巣の再燃に対し PBSCT 併用超大量化学療法を施行し転移巣は消失した。現在, 経過観察中である。【結語】PBSCT 併用超大量化学療法を施行した IV 期非小細胞肺癌症例を経験した。

25. 化学療法が奏効し長期生存中のパネコースト肺癌の 1 例

名古屋市立東市民病院外科

濱口真帆, 杉戸伸好, 田中宏紀
同 呼吸器内科

太田一隆, 沓名建雄, 花木英和

症例, 50 歳女性。平成 6 年より左肩の凝り, 翌年左上肢しびれと疼痛が出現した。平成 8 年 3 月に Hornel 症候群が出現し, 当院受診。胸部 X 線上異常陰影を指摘され, 精査の結果 Pancoast tumor と診断された。術前化学療法, 照

射施行後左肺全摘術施行。その後, 胸骨転移, 脳転移, 胸膜転移が出現。照射での改善はなく, docetaxel+carboplatin 併用化学療法にて CR が得られた。2 年を経た現在も CR が継続中である。

26. 非小細胞肺癌のプラチナ製剤を含む化学療法不応症例に対する Docetaxel/Gemcitabine weekly 併用療法の臨床第 I/II 相試験

名古屋市立大学医学部第二内科

秋田憲志, 河口治彦, 前田浩義
二宮茂光, 山田由香, 新美 岳
杉浦芳樹, 吉野内猛夫, 佐藤滋樹

愛知県がんセンター

大同病院

吉川公章, 西尾昌之

名古屋記念病院

荻須信夫

プラチナ製剤を含む化学療法不応の NSCLC 症例に対し Docetaxel (DOC), Gemcitabine (GEM) を day 1.8 に投与し, 3 週毎に繰り返す投与方法において, 至適投与量を決定し, その投与量における安全性と有効性を評価するため本試験を計画した。

投与量レベル	0	1	2	3	4	5
GEM (mg/m ²)	600	800	800	800	800	800
DOC (mg/m ²)	30	30	35	40	45	50

現在レベル 2 施行中。延べ 12 コース終了し, 2 コースで Grade II 肝機能障害, 1 コースで Grade III の間質性肺炎を観察した。

27. I 期原発性肺癌切除例におけるリンパ節転移予測因子の検討

愛知県がんセンター胸部外科

福井高幸, 川崎徳仁, 立花慎吾
波戸岡俊三, 篠田雅幸, 陶山元一
光富徹哉

当院で 1991~95 年に切除した原発性肺癌 I 期 (臨床病期) 症例 183 例 (肺癌 141 例, 扁平上皮癌 43 例) を対象として, 術前に得られる情報からリンパ節転移の有無が予測できるか検討した。腫瘍径では pN (+) が 15mm 以下で 5.6%, 16~30mm で 23.2%, 31mm 以上で 33.3% にみられた。組織型別では腺癌では 27.2%, 扁平上皮癌では

16.7% に pN (+) がみられた。また CEA 値では正常値群で 12.1%, 高値群で 33.3% に pN (+) がみられた。腫瘍径 15mm 以下の扁平上皮癌では 1 例のみに pN (+) を認め, 腺癌では 1 例も認めなかった。

28. 原発性肺癌における血清 (Vascular Endothelial Growth Factor) VEGF 測定の意義

藤田保健衛生大学第二教育病院呼吸器内科

宮崎淳一, 立川壮一, 堀口高彦
笠原純一, 志賀 守, 近藤りえ子

杉山昌裕, 佐々木靖, 廣瀬正裕

照屋林成, 坂野健吾, 伊藤友博

同 病理

堀部良宗, 今枝義博

原発性肺癌患者 92 例 (腺癌 56 例, 扁平上皮癌 22 例, 小細胞癌 12 例) で, 化学療法前後での血清 VEGF を測定し, 同時に CEA, CYFRA21-1, proGRP を測定, 年齢, 性差, 組織, T 因子, N 因子についても予後因子としての意義を比較検討した。また免疫組織学的染色による血清 VEGF 値との関係について検討した。結果, 血清 VEGF は治療効果を反映し, 多変量解析により, 原発性肺癌の予後因子となる可能性が示唆された。

29. Film in situ Zymography 法を用いた肺癌組織における MMP 活性

名古屋市立大学医学部第二外科学教室

梶 政洋, 山川洋右, 森山 悟

深井一郎, 桐山昌伸, 藤井義敬

癌の浸潤性増殖, 転移は癌細胞自身による細胞周囲の細胞外マトリックスの分解や破壊を伴って生じる現象と考えられている。この分解及び破壊機構に関与しているものの一つが MMP (matrix metalloproteinase) である。今回, 我々は肺癌組織の MMP 活性を Film in situ Zymography 法 (以下, FIZ 法) を用いて解析し, 臨床像との比較検討を試みた。その結果, MMP 活性とリンパ節転移, 病理病期との間に相関を認めた。FIZ 法は局所の MMP 活性を測定する上で有用である。